

石川の工芸 女性作家のきらめき



山本茜《源氏物語シリーズ第19帖「薄雲」(雪明り)》
中谷宇吉郎雪の科学館蔵

- 天神信仰と文房具
- 九谷焼の美
- 人体彫刻考2 一奏でる一
- 優品選【近現代絵画・彫刻】

- 3月の企画展示室
- 展覧会回顧
- ミュージアムレポート
- 3月の行事予定
- アラカルト ただいま展示中



県文《青手桜花散文平鉢》古九谷

第5展示室

特別陳列

石川の工芸 女性作家のきらめき

2月16日(木)～3月22日(水) 会期中無休

学芸員の眼

第5展示室では、約2/3のスペースを使って「女性作家のきらめき」展を行い、残りの1/3ではより幅広く所蔵作品を「ご覧いただく」と、通常のコレクション展示を行っています。とはいえまったく関連性がないわけではなく、今回は女性作家たちの師が制作した作品を取り上げました。たとえば三代 徳田八十吉や、二代 砺波宗斎のいこで、市島桜魚の師でもある大場松魚、友禅作家の成竹登茂男、さらに竹工作家・本江和美が師事した橋本仙雪など、石川の工芸界を牽引してきた作家が勢ぞろいしました。師と弟子の作品にはもちろん共通点もありますが、比較してごらんいただくことで、女性作家のきらめきを、あるいは師となる作家の迫力を、どちらもお楽しみいただけるかと思えます。どうぞ会場内を行き来して、じっくりご覧ください。

本展示で取り上げる二十二代作家のうち、もともと早く活躍したのは明治二十九年生まれの天野文堂です。はじめ坂上藤太郎から沈金を学び、坂上が亡くなったあとは藤井観文について指導を受けました。大正十二年、輪島漆器会では女性として初めて、弟子をとつたことも知られています。昭和六年、第十二回帝展に初入選、二十三年には日展で特選を受賞するなど、全国規模で活躍しました。蒔絵師の天野三郎と結婚し、出品中の《鳥巢文庫》(輪島漆器商工業協同組合蔵)などをともに制作しました。蒔絵で樹木と小鳥を描き、巢の中には小さな卵が見えます。文堂は葉脈を沈金であらわし、また蓋を開けると中にも沈金彫りの装飾が施されています。花や鳥をテーマにした作品が多く、大らかでのびのびとした作風が見どころです。

さて文堂はみずから漆の世界に入り、夫と協力して制作を続けましたが、意図せず漆工作家の道

へ進んだ人物もいます。それが二代 砺波宗斎でした。紺谷光俊・畠山錦成に師事し、国民学校で日本の指導にあたっていました。しかし、第二次世界大戦のころに男兄弟二人を亡くしたため、父・砺波宗斎の跡を継ぐことになったのです。昭和二十五年から父に髹漆(漆を塗ること)、いとこの大場松魚に加飾の技術を学びます。植物文を中心に清雅な作品を手がけ、日本伝統工芸展などを舞台に活躍しました。

彼女たちは偶然、家族に漆工作家がいて、彼らとの関わりの中からすぐれた作品を生み出しました。一方、現代では自ら工芸作家となる道を選び、活躍する女性も多くいます。本展示ではその両方の作品を取り上げ、女性作家がいままでにどうやって工芸界へ飛び込み、活躍してきたのか、その一端をご紹介します。



天野文堂《平和の秋》



二代 砺波宗斎《蘭花文蒔絵箱》

天神信仰と文房具

2月16日(木)～3月22日(水) 会期中無休

前号に続き、前田家の天神信仰をめぐる話です。菅原道真の物語は、よく知られています。幼い頃から文武に優れ、右大臣になった道真ですが、藤原時平の讒言により、大宰府へ流されます。道真が失意のうちに大宰府で亡くなると、京都では異変や災害が相次ぎ、政敵であった時平が没し、清涼殿落雷と続いたことから、これらは道真の怨霊の仕業と語られ始め、新たな物語が生まれます。道真の亡霊による復讐譚です。

亡霊となった道真は、延暦寺の僧正を訪ね、これから復讐をするので邪魔しないよう請います。僧正より、帝から三度の要請があつたら御所へ向かうと言われた道真は怒り、目の前の柘榴を噛み砕き吐き出すと、それは炎に変わります。これが柘榴天神の

エピソードです。その後、御所へ向かった道真は、雷神となつて雷を落としますが、こうした物語は後に「天神絵巻」として描かれたほか、能(雷電)を生み出します。

後に加賀藩十三代藩主前田斉泰は、この(雷電)を改作した(来殿)をつくります。道真没後九五〇年にあたる嘉永五年(一八五二)のことです。前半の柘榴天神のエピソードは変わりませんが、後半は道真を雷神とはせず、大富天神という雅な神になり、帝に感謝しながら優雅な舞を見せる能に改めました。改作にあたり斉泰は「九五〇年忌の神事には、風雅な舞曲を奏でたい」と願い、道真の怒りを題材とした(雷電)は相応しくないと考えたのです。斉泰の信仰心がうかがえます。

《縄敷臨水天神画像》

九谷焼の美

2月16日(木)～3月22日(水) 会期中無休

九谷の窯跡から出土した陶磁片を見ると、大聖寺藩は日常使用される食器類の生産によつて窯の安定的な経営を図ろうとした状況がうかがえます。古九谷の伝世品に結びつく陶磁片の出土が少数であることもそこから理解されます。しかし、九谷の窯は加賀地区の陶磁器の需要に十分応えることができなかつたようで、十七世紀末頃には廃絶となりました。そのため陶磁器は九州や京都から購入せざるを得ず、莫大な藩金が出す事態となりました。そこでその防止策として、新たな藩営による製陶プロジェクトとして一八〇七年に立ち上げられたのが金沢の春日山窯でした。京都の名工・青木木米が肥前島原出身の本多貞吉を助手として製陶にあたりましたが、翌年の金沢城大火による藩の財政逼迫により民営と

なつたこと、木米の意向が経営方針にそぐわなかつたことにより、わずか二年で木米は京都に戻りました。

しかし、貞吉が若杉窯に移り花坂村で良質の陶石を発見したことにより、再興九谷の展開は大きな局面を迎えます。若杉窯は藩の保護を受けて生産体制を整え、明治時代に至るまで日用品から祥瑞、古九谷、伊万里、唐津の様式を模したもので多様な需要に対応しました。若杉窯に少し遅れて、一八二四年に大聖寺の豪商・豊田伝右衛門が古九谷再興への強い信念をもつて古九谷窯跡の地に吉田屋窯を開きました。生産と流通の便を図るため二年後には山代に窯を移しましたが、日用品とともに芸術的完成度を追求した作品を、名工を招聘して制作した姿勢は、八三年の廃窯後も形を変えて諸窯に継承されました。



《色絵万年青図平鉢》吉田屋窯

第3・4・6展示室【近現代絵画・彫刻】

優品選

2月16日(木)～3月22日(水) 会期中無休

油彩部門では中川一政、宮本三郎、高光一也、鴨居玲等の物語作家から、現在活躍中の前田昌彦、田井淳、法邑利博等の中堅作家まで、石川ゆかりの画家たちの優品をご覧いただけます。前回は風景画を二点紹介しましたので、今回は人物画から高光一也の《母子》をご紹介します。日本の美術界に抽



鈴木華邨《桃鶏図》

前回、日本画は梅をモチーフとした曲子光男の《開春》について記しました。今回は桃の作品、鈴木華邨の《桃鶏図》をご紹介します。まだかたい蕾を付けた桃の木の背景と、日本鶏のつがいに三羽の雛が描かれた図柄には繁栄の願いがこめられています。雛のやわらかな毛並みは、つい両手ですくい上げたくなるような軽い衝動を覚えます。同じく華邨の二曲一雙の屏風に対照的な表現が面白い《竹梅図》も展示します。

油彩部門では中川一政、宮本三郎、高光一也、鴨居

象美術が席卷した時代、高光は人物と抽象との接点をアフリカ彫刻に見いだしました。細長く引き伸ばされ単純化した形体は、バンバラ族やドゴン族の母子像に、強く結びついています。高光の六〇年に及ぶ画業の中で異色の作品と言えるでしょう。彫刻は、早春をテーマとする作品と共に、本館彫刻コレクションの優品も展示します。代表作を紹介します。高橋清《人とトラロック》は中南米の古代の雨の神がテーマの木彫作品です。氏は石の作家として有名ですが、粗く鑿跡を残す木彫にも魅力的な作品がみえます。石彫と同じように自然や素材との対話を進める制作にあっても、人に対する温かな眼差しも感じられる作品といえます。

第4展示室

人体彫刻考2

—奏でる—

2月16日(木)～3月22日(水) 会期中無休

人体をモチーフとした彫刻において、音楽・楽器に關係する様々な作品があります。そのような作品には、各種楽器演奏に興じる人物の姿を表した作品がある一方、楽器の形と人の姿を融合させ造形的に調和を図った作品もみえます。特に演奏楽器により各楽器の持つ音曲的特徴や雰囲気に沿ったところの姿で表される演奏者と、楽器が奏でる音楽性や旋律が造形的に融合したイメージの作品が多くみえ、例えば優雅な音曲を発する楽器にはそれに相応しい華やかな意匠の人物が、また深遠な調べの楽器にはそれに相応しい姿で表されるように、音楽性をテーマに演奏者と融和した作品例がみえます。

出品作を紹介しますと、澤田政廣《笛人》は、天女と思しき女性が横笛を吹く姿を表した木彫作品ですが、木の質感を活かしながらも着色された部分の対比が奏功し、澄み渡る笛の音色を感じさせる爽やかな作品です。坂垣道《御陣乗太鼓》は石川県輪島の名舟の御陣乗太鼓をモチーフにした作品です。作品では太鼓こそ表されていませんが、太鼓の発する勇壮な響きと仮面の演者の迫力を感じさせてくれます。木村珪二《鳴器》は楽器のアウトラインと女性のボディラインとを重ねた造形作品で、官能的なイメージを連想させてくれます。展示では、彫刻と楽器や音楽に關係する各種彫刻作品をご覧いただき、音楽と立体造形の融合する世界をお楽しみください。



澤田政廣《笛人》

3月の企画展示室

第7展示室

第四〇回 伝統九谷焼工芸展

3月2日(木)～16日(木) 会期中無休

昭和五十一年に認定された石川県指定無形文化財保持団体九谷焼技術保存会が、技術保存・発展向上を図るための事業として毎年行っている公募展で、入選作並びに九谷焼技術保存会会員の作品を一堂のもとに展示します。

今回は第四〇回特別展として、九谷焼技術保存会物故会員(北出不二雄氏・高木松生氏・三代徳田八十吉氏・吉田莊八氏)法要展を行います。

◇観覧料／一般：三五〇円(二八〇円)

大学生：二八〇円(二二〇円)

高校生以下無料

※()内は二十名以上の団体料金。当館友の会員は、会員証の提示により団体料金になります。

◇連絡先／能美市泉台町南十三番地 石川県九谷会館内

九谷焼技術保存会事務局

電話：〇七六一五七〇二二五

第8展示室

重要無形文化財指定四〇周年記念展 輪島塗

3月2日(木)～16日(木) 会期中無休

「輪島塗」は一九七七年に重要無形文化財に指定され、輪島塗技術保存会がその保持団体として国の認定を受けました。漆芸では全国で唯一の認定団体であり、歴代会員がその技を受け継ぎながら、日本の漆文化の継承発展のために堅実に歩を進めてきました。

本展覧会では、四〇年にわたる輪島塗技術保存会の活動を、約八〇件の展示品を通じてご紹介いたします。会員たちが後世に伝えるべく技の粋を尽くした作品、並びに永年実施している伝承者養成事業の成果品、さらに製作道

具や工程見本を加え一堂にご覧いただきたく存じます。

◇入場無料

◇連絡先／輪島市河井町二〇一一

輪島塗技術保存会事務局

(輪島市教育委員会文化課内)

電話：〇七六八一三二七六六六

第9展示室

楽アナザーワールド 彫刻家 樂雅臣展

3月2日(木)～16日(木) 会期中無休

石彫家・樂雅臣(一九八三年)は、茶の湯の歴史とともに茶碗師として四五〇年以上にわたる時を重ねてきた京都・樂家、その第十五代樂吉左衛門の次男として生を受けました。東京造形大学大学院を卒業後、独自の感性で抽象的なフォルムの作品を発表し続ける注目の作家です。

「石の中に表現を、表現と共に自然を。」樂が彫刻する上で大切にしているこの言葉どおり、決して石を支配する事なく生み出された作品の神秘的な世界をご覧ください。

◇観覧料／一般：八〇〇円 高：大学生：六〇〇円

小：中学生：四〇〇円

◇連絡先／ケイ・シー・エス 電話：〇七六一三四一四四一

第7展示室

金沢辰巳丘高等学校 第二十九回 芸術コース美術専攻作品展

3月19日(日)～21日(火) 会期中無休

本校芸術コース美術専攻は『美術系大学への進学に対応した実技力の育成』を目標に、創立以来、美術の基礎・基本の定着と高い造形表現力の育成を行ってまいりました。卒業生は金沢美術工芸大学をはじめ全国の美大・芸大・美術

教育系学部へと進学し、絵画、彫刻、工芸、デザイン、映像、アニメーション、美術教育界など、地元石川のみならず全国、さらには海外において美術文化や美術教育の担い手として活躍しております。

この展覧会は、今年度の卒業生二十一名が、日本画、油絵、彫刻、デザインの四つの専科での学習成果を展示発表するものです。この機会を通して、本校美術専攻生徒と本校美術教育の一層の成長、発展への励みにしたいと考えております。

◇入場無料

◇連絡先／石川県立金沢辰巳丘高等学校 詠周史

電話：〇七六一三九二二五二一

第8・9展示室

16 玄土社書展

3月19日(日)～21日(火) 会期中無休

玄土社の二〇二六年中の歩みをまとめた創作(抽象)四十八点、古典臨摹(写し)十九点をお目にかけます。

創作は自由にチャレンジ精神をもって、臨摹は古典に忠実に。この玄土社の基本姿勢はかわることなく今展で四十四回となります。表意文字である漢字、その古典の摸写復元を試みることで本当の歴史が見えてきます。また一方では揺れ動き進化する抽象表現の愉しさ。どちらも私たちにとつて欠くことのできないワークです。独自の活動をする在野のグループ玄土社ならではの古典と新しい表現の世界をご覧ください。好機会です。

◇入場無料

表立雲トクタイム「表意文字―王羲之―実用書家」

◇日時／三月十九日(日) 午後時三十分～午後三時

◇連絡先／玄土社本部表 金沢市本多町一七十五

電話：〇七六一三三三三三〇

「絵画にみる江戸のくらし ―浮世絵版画を中心に―」

当館の浮世絵コレクションをご覧いただく大規模な展示は、平成十八年の「広重・北斎・歌麿 UKIYO 絵展―眠りから覚めた秘蔵作品初公開―」からほぼ十年ぶりのことです。県美にこんなコレクションがあったのか、と驚かれる声も聞かれました。

今回の展示では、特定の絵師に注目するというよりは、浮世絵を通して江戸のくらしを感じていただくことをねらいとして、江戸時代の人々の生活が身近に感じられるような構成を目指しました。実際に作品を展示してみると、頭の中で考えていたようにうまくいかないこともあり、展示しながら試行錯誤の繰り返しでした。一方、展示に際して作品を近くで見ることによって、当時の木版画技術の、驚くほどの精密さを再認識させられました。

一月二十一日(土)、二十二日(日)には、(公財)アダチ伝統木版画技術保存財団のご協力を得て、摺りの実演と体験のワークショップを行いました。摺り師によって、葛飾北斎『富嶽三十六景 神奈川沖浪裏』が摺り上がっていく過程では、職人のわざのあざやかさに感嘆するばかりでした。鮮烈なブルシアンプルー(ベロ藍)を見ていると、色彩あふれる江戸時代の豊穡な絵画世界の一端が感じられました。

アンケートでは、有り難いことにもっと見たいというお言葉もいただきました。今回、残念ながらお見せすることの出来なかつた作品がまだまだありますので、今後、当館の浮世絵コ



深斎英泉(今様美人拾二景 東叡山寛永寺うれしそう)

レクションの新たな魅力をご紹介します。ければと思っ
ています。

ミニージアムレポート

「絵画にみる江戸のくらし」の会場内に『江戸のくらしミニミニ新聞』が掲示されていたのをご存じでしょうか。この展覧会は浮世絵版画を中心とした展示でしたが、浮世絵は小学校六年生の社会でも勉強するというところで、子どもたちにもみてもらいたい展覧会でした。当館では企画展ごとに、子どもたちにもその展覧会で特に目を向けてほしい情報をまとめた、子ども用パンフレットなどを制作しています。今回は『浮世絵版画から江戸のくらしやその様子から見つけたこと・わかったこと』を、ミニミニ新聞にまとめてみよう』と投げかけ、新聞づくりのワークシートを用意しました。とはいえ、このワークシートの参加は子どもたち限定ではなく、どなたでもご参加いただけるものとし、この展覧会をご紹介します教職員の研修会でも書いていただきました。

一月十五日には、小学生親子対象のキッズ・プログラム「江戸のくらしミニミニ新聞をつくらう」を開催し、浮世絵作品にまつわるクイズからその答えを探しながら作品をよく見たり、また、自分なりに想像したりしながら、楽しく江戸のくらしについて学びました。そして、最後にクイズで正解を得られなかつた、また、自分にとって意外な答えだった作品をネタに江戸のくらしミニミニ新聞づくりです。キッズプログラムでは、「帰宅後もご家庭で話題になるような印象に残る活動」の提供を目指しています。今回の活動でも、親子並んで同じ作品について新聞を書いているご家族も多く、このような美術鑑賞を通して、親子の触れ合う時間になればと考えています。



講演会記録

シンポジウム

「工芸からKŌGEIへ」～東京国立近代美術館工芸館の役割～

東京国立近代美術館工芸館の石川県移転に先立ち、平成二十八年十二月二十一日(水)から平成二十九年二月十二日(日)の会期で、「東京国立近代美術館工芸館名品展 近代工芸案内」が開催されました。その関連企画として、一月八日(日)に、(独)国立美術館理事長・馬淵明子氏、金沢卯辰山工芸工房館長・川本敦久氏、石川県立美術館長・嶋崎丞をパネラーに、東京国立近代美術館工芸課長・唐澤昌宏氏をコーディネーターとして、「工芸からKŌGEIへ」と題したシンポジウムが行われました。

まず唐澤氏より工芸館の概要が説明された後、各パネラーの発表、そして全員による意見交換という流れでした。馬淵氏は、日本の型紙がヨーロッパのデザインに与えた影響を引き合いに、工芸を世界に向けて発信することの重要性を指摘されました。嶋崎館長は、工芸館の収蔵品の内訳について言及し、石川県へどのようなものを持つてくるかという問題提起があり、川本氏は藩政期から金沢美術工芸大学へと連なる工芸の土壌についてご発表いただきました。

意見交換では、石川県という工芸が盛んな地域性をふまつつつも、国立館として総合的な視野をもつことの重要性や、限られた時間の中で、人員や資金などの現実的な部分を見据えた議論が必要であるなどの発言がありました。

今後、工芸館移転に関して、ぜひ皆さまのご意見を頂戴できればと存じます。



三月の行事予定

■土曜講座		午後1時30分～	美術館講義室	聴講無料
3月4日(土)	前田家の天神信仰と能(来殿)		村上 尚子	
11日(土)	日本画とエロティシズム		前多 武志	
■キッズプログラム	午後1時30分～	2階ロビー集合	参加無料	
3月5日(日)	九谷焼ものがたり			

次回の展覧会

前田育徳会尊經閣文庫分館	名物裂と茶道美術	3月27日(月)～4月16日(日)	会期中無休
第2展示室	茶道美術名品選Ⅰ	3月27日(月)～4月16日(日)	会期中無休
第3～9展示室	第七十三回 現代美術展 日本画・工芸・書	3月30日(木)～4月16日(日)	会期中無休

風景の中の豎琴 ふうけいのなかのたてごと
昭和62年(1987) 縦115.3×横89.5cm

吉田隆 よしだ・たかし
昭和28年～(1953～)



本品は立体とレリーフを組み合わせた形態のブロンズ作品で、独自の造形世界を作っています。バックのレリーフには、樹木と佇むペガサスを高肉彫で表しギリシア神話に関連する作品背景を物語っています。レリーフの前には同じく古代ギリシアの衣装の人物立像を配し、古代の豎琴を持っていきます。人物も作家独特の古代ギリシアのロマンをテーマとするものですが、像の頭部と豎琴は真鍮製のものを組込んで、作品全体が具象表現にあって一部、抽象的形態を織り交ぜたものとなっています。作品は立像とレリーフが響き合いロマン溢れる独自の雰囲気形成する一方、静

謐で象徴的な空間の創出と現代的なセンスも併せて感じさせる作品です。
作家は七尾市出身。父は彫刻家、故吉田雪山氏。金沢美術工芸大学彫刻専攻研究科を修了。イタリアに留学し帰国後は各種彫刻コンクールで活躍するとともに国内外で屋外彫刻設置を進めています。現在、作風は本品のような具象彫刻から転じ、鉄やステンレスなどの金属板の溶接による抽象的でダイナミックな作風へと変化を示しています。
(本作品は、二階第4展示室で開催中の、特集「人体彫刻考2―奏でる―」でご覧いただけます)

ご利用案内

コレクション展観覧料
一般 360円(290円)
大学生 290円(230円)
高校生以下 無料
※()内は団体料金
毎月第1月曜日はコレクション
展示室無料の日(3月は6日)

今月の開館時間

午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間

午前10:00～午後7:00 年中無休

3月の休館日は
23日(木)～26日(日)

友の会手続きが始まります!

三月一日(水)より、来年度友の会新会員の募集、更新手続きが始まります。直接県立美術館でお手続きいただけます。郵便振替をご利用し、お申し込みください。現在会員の方も、継続を希望される方は、更新の手続きをお願いします。

■有効期限/平成二十九年四月一日
平成三十年三月三十一日

■年会費/二、〇〇〇円

■主な特典

- ・コレクション展の無料観覧
- ・企画展入場券進呈
- ・企画展の開会式(開会式がない場合は初日)にご招待
- ・入館料の割引
- ・最新情報をお伝えする美術館だより(本誌)を毎月送付
- ・館内カフェにてドリンクの割引



談議所栄二(秋)をクローズアップしたデザインです。友禅作家の談議所は金沢市に生まれ、日展で活躍しました。

健康告知なしでカンタンに入れる
女性のための保険

月払 400円 全年齢一律

お手頃な保険料に関心がある方へ
無告知型女性特有疾病一時金保険

保険料は全年齢共通
20歳から79歳までの方が月払400円でお申込みできます。

女性特有の7つの病気を保障します。

保険金は一時金で最大10万円をお支払い

通話無料 0037-6001-60657
受付時間 10~19時(日曜定休)
お気軽にお問合せください!

引受保険会社 さくら少額短期保険株式会社
〒171-0014 東京都豊島区池袋二丁目16番13号 光ビル
株式会社ニュートン・ファイナンシャル・コンサルティング
保険専業代理店

※無告知で入れる女性特有疾病一時金保険について(2016年11月現在さくら少額短期)
広告有効期限:2017年9月30日 承認番号[3434HN1612]

石川県立美術館だより
第401号(毎月発行)
2017年3月1日発行
〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel:076(231)7580
Fax:076(224)9550
URL http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/